
巻頭言

東日本大震災は多くの人命を奪い、生き延びた者にも心身に癒しがたい傷跡を残した。自然の猛威の前に人間はなすすべもなく、家々が津波に押し流されるのをただ見つめるしかなかった。大震災から1年が経過し、多少なりとも客観的に我々の体験を見つめなおすことができるようになった。この体験を周囲の人々に、また後世に伝えることが我々震災体験者の義務であると考えている。そしてこの体験が将来再び来るであろう次の大震災への備えに役立つものでなければならない。

本書の特徴は次のような2部構成になっている点である。第1部は同窓会員に対して行ったアンケート調査の結果を分析し、浮かび上がった問題とそれに対する対策をまとめた。主なものをいくつか挙げると、ライフラインに関しては、これまで患者用の水・食料の備蓄しか行ってこなかったが、東日本大震災規模の災害になると職員用の水・食料の備蓄も必要であることが分かった。また、これほどまでに深刻なガソリン不足は誰も想定しておらず、今後行政面での医療従事者用車両への優先供給システムの確立が望まれる一方、電気自動車の開発と普及に一層拍車がかかると思われた。通信手段として発災直後でも使用可能な衛星電話の普及に力を入れるべきであろう。医療面では、震災時の医薬品、医療材料の供給ルートを平時から確保しておくこと、他地域の医療機関と相補的な協力体制を確立すること（滅菌システムなど）、カルテ、画像などはバックアップさえ安全な場所にとっておけば電子媒体のほうが災害に強いこと、などである。詳細は中をご覧ください。第2部は誌上シンポジウムで、津波で甚大な被害を受けた気仙沼（気仙沼市立病院、条南整形外科）、石巻（石巻赤十字病院、池田整形外科医

院)、多賀城(仙塩総合病院)の3市と、地震・津波に加えて福島第一原子力発電所事故による放射能汚染という全く異質な問題への対応を迫られたいわき市(磐城共立病院)の同窓会員から被災体験とその対応について報告してもらった。また、仙台在住の杉田健彦会員には、震災後に行った患者アンケート調査から、人工膝関節置換術(TKA)を行った患者たちは津波から自分の身を自分で守ることができ、QOLの改善のみならず震災時の救命につながったという結果を報告してもらった。

本記録集は写真や文章だけではなく、アンケートの結果はすべてグラフや表にまとめることで、データを詳細にかつ分かりやすく提示するように心がけた。また、できるだけ多くの人々の目に留まるよう、書籍としての出版のみならず、東北大学整形外科学教室のホームページ(<http://www.ortho.med.tohoku.ac.jp/>)上にも全内容を掲載することになっている。

大震災はいつ、どこで起こるか誰も分からない。だからこそ、日ごろから可能な限りの備えをしておかなければならない。この記録集を手にしたその日から、震災への備えを始めていただきたい。

東北大学大学院医学系研究科医科学専攻
外科病態学講座整形外科学分野
教授 井樋 栄二